

2024年3月31日 No.3713

先週の講壇から

“無理強い”

マタイによる福音書第 27 章 32 節～44 節

聖句「兵士たちは出て行くと、シモンという名前のキレネ人に出会ったので、イエスの十字架を無理に担がせた。」(27:32)

1. 《重さを感じる》 子育ての真っ最中に腰痛を患ったことがあります。兄弟合わせて 50 キロ以上が押し掛かって来るのですが、それは幸せな重さでした。「嬉しい重さ」も「悲しい軽さ」もあります。臨月近くになってから流産した女性が長い放心状態の後、軽くなってしまった自分の体に、感情の制御が出来なくなったのを見たことがあります。心身に大きなダメージを受けたのです。重くて難儀するだけではなく、軽くて悲嘆の極みを味わうこともあるのです。
2. 《十字架の重さ》 映画や絵画と異なり、受刑者が運ばされるのは十字架の横木だけです。縦の木(「親柱」)は刑場に立っているのです。総督官邸のあったアントニア要塞からゴルゴタの丘までは直線距離で 5 百メートルです。道が折れ曲がっていても 1 キロ足らずです。健康な壮年男性なら担げない距離ではありません。しかし、自分が磔にされる柱を担いで、罵詈雑言や石を投げ付ける見物人の中を歩いて進むことは、大変な責め苦でした。躊躇する死刑囚には、兵士が容赦なく鞭を振ります。受刑者の中には、精神錯乱を起こしたり、気絶して倒れて、横木を運べなくなってしまう者もいたのです。そんな時には、見物人が荷役に駆り出されたのです。十字架の重さとは、そういう種類の重苦しさだったのです。

《無理強いする》 イエスさまが「自ら十字架を背負った」と雄々しいイメージで語っているのは「ヨハネによる福音書」だけです。「共観福音書」は、兵士たちが「イエスを引いて行った」「引き出した」とあるばかりです。拷問と虐待を受けて、歩くことも出来ぬ程に衰弱していたのです。磔にされる前に、既に半死半生の状態であったことは、兵士たちが栄養ドリンクを飲ませようとしたこと、その日の内に主が息絶えたことから伺えます。シモンが肩代わりさせられた横木は重くはなかったでしょう。しかし、衰弱し切ったイエスさまには担げない程に重かった。重さは一人一人によって違うのです。私たちは同じ重さを分担するように強いられる画一主義の社会に生かされています。でも健康な私たちも、いつか「引かれて行く」時が来るのです。その悲しみを主は御存知なのです。

朝日研一朗牧師